2008年度プロジェクトB4　研究報告（8）
戦後の農民運動と農村の変容

はじめに

西川長夫

今回の研究報告（8）は二部に分かれている。前半，第一部には，松下清雄の遺作『草青火』に関する二つの論説が収められている。最初の，内藤由直「［翻刻］松下清雄“ユダの裏切り”―に関するメモ」は，立命館大学に寄贈された松下清雄の蔵書の一冊『ユダの福音書を追え』（ハーバート・クロスニー著，日経ナショナルジオグラフィック社，2006年5月）に残されたユダの「裏切り」に関する書き込みの「翻刻」と「解題」から成っている。「翻刻」を読まれた読者は，松下がすでに予告された死の床で改めて生涯のテーマに出会い，『草青火』を完成させるに至る経緯の一端を知ることが出来るだろう。それを読み解いた内藤の「解題」はそれ自体が見事な『青草火』論になっている。また倉本知明「松下清雄『青草火　鳴かなかった鳥たちの祀り』を読む」のテーマも期せずして「裏切り」であるが，この短いエッセイ風の論考も実に見事に作品の本質に深く切り込んでおり，「裏切り」が政治や宗教的な運動だけでなく，歴史や思想や人間の日常的な営みの中で果たす本質的な役割の考察にまで及んでいる。私はこの二人の若い研究者の文章を読みながら，松下清雄が病床で死の直前まで書いていた，ほとんど遺言書と言ってよいこの作品の次の世代への呼びかけが，こうして見事に受け止められていることに感動を禁じえなかった。これは『草青火』に対する若い読者のほとんど最初の応答であり，私には墓前に供えられた二束の野の花を思わせるものであった。

第二部，本報告書の後半は，研究報告（5）（『立命館言語文化研究』，2009年8月，第21巻1号）に収められた，いいだもも氏の論考に関するものである。この長文の論考を，私どもは松下清雄氏への追悼文として受け取り掲載させていただいたのであるが，この論考の投げかけた波紋は大きく，かなりの数の反論や事実誤認の訂正を求める文章をいただいた。私たちの研究報告書には，戦後の動乱期に学生運動や農民運動に関わった方々の多くの発言や証言が収められている。だがそうした証言には時に錯誤や思い違いが無いわけではない。私たちはこの報告書に掲載された文章に対する批判や訂正要求があったときは，その文章をそのまま掲載したいと考え，その方針をある程度実行してきたのであるが，今回，立命館大学国際言語文化研究所の運営委員会からこうした方針に対する異論が提起された。国際言語文化研究所長から伝えられたその趣旨は次の通りである。委員会としては研究の場である『立命館言語文化研究』を政治的な論争の場にしたくないので，寄せられた批判や訂正要求の文章はそのまま掲載するのではなく，この研究会の責任者である西川が，それを要約紹介する形を取ってほしい。また以後この問題に関する議論は一切掲載しない。さらにこの研究会の研究報告は次号（9）で終わりにする。―私は，そしてこの研究会のメンバーも，この運営委員会の論理と決定に必ずしも納得していないが，最終的なものとして出されたこの決定には従わざるを得ない。従って不本意ではあるがこのような形で研究報告をつづけることは，すでに編集が始まっている次号で終わりにした

い。次号は松下清雄の長編小説『三つ目のアマンジャク』に関する論考を中心に組まれることになると思う。不本意な終り方であるが，これまでお世話になった多くの方々に心から感謝の気持ちを記させていただきたい。